

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成十九年八月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十四巻第四号（通巻第一六〇号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第160号

8. 2007

## 夏蜜柑

品川 鈴子

夏蜜柑土石崩れに踏ん張りぬ

俄か帰省は持山の崖崩れ

出水策遠き地主も呼び戻し

話が違ふ炎昼の遠路来て



零余子粒水車しぶきを煌めかす

浄水の放流蒲の絮も翔く

白<sup>はく</sup>皙<sup>せき</sup>の荆眉しかめ茱萸味見

紅毛の脛蹴り麻の長袴

麻袴しやちこぼりたる太郎冠者

白<sup>しろ</sup>南<sup>な</sup>風<sup>かぜ</sup>に女声の透る太郎冠者



# 玉鈴吟

大阪 池田 かよ

みかん咲く「糸我」の文字も王寺跡  
花みかん風の荒息香を攫ふ  
練供養衣裳しらべの錦延べ  
藤棚の高さに渡す浄土橋  
黒潮の幸の太刀魚鮪得たり

大阪 石橋 萬里

箸で採る誓子の墓の櫻薬  
貼り薬匂ふ遍路とすれ違ふ  
行々子八十路の水夫の喋り詰め  
しんがりに小犬乗り込む遊び舟  
春愁を鳴門の渦に捨てて来し

愛知 市川十二代

夏蕨採る甍鹿の糞踏んづけて  
郵便受け無住寺に有り落し文  
薫風へ犬を走らす訓練士  
行く先を決めかねてゐる墓  
二人目を恵まれし娘に新茶汲む

東京 市橋 章子

火打石神輿繰り出すビルの街  
葛籠屋に漆匂へり町薄暑  
オーブンカー氏子総代端座せり  
短めに祭衣を詠へて  
木の芽風絵馬通りてふ門前町

愛媛 今井 忍

春炬燵虫歯堪えて丸く寝る  
送別の薔薇抱き握手幾度も  
音もなく紙吐くコピー機春の昼  
白蝶のひらひら隣の嬰抱きて  
受話器手に揺れる小手毬見ておりぬ

大阪 今谷 脩

郭公や里山守る村に入る  
たんぼぼの絮流れ入る藁廂  
蛇苺ぬめりて赤し蛇に怖づ  
田を植ゑて能登の棚田に人集ふ  
街薄暑花魁道中の下駄さばき

香川 齋部 千里

露座仏を反り身で仰ぐ山若葉  
青葉影載せて水車の廻る音  
吾が家の古巢まよわず燕来る  
みたらしの杓に螢が火を点ず  
初鯉ひとときわ糶の声高し

兵庫 浮田 胤子

しやりしやりとグリーンサラダの中の独活  
夏休みぢぢの回転椅子が好き  
五月美し汚すニユースの多き事  
草だんご子らと丸めしも昔  
鶏がすぐ食ぶ掘り出しし夜盗虫

兵庫 馬越 幸子

ゴールデンウィーク  
黄金週間 関門橋より始まりぬ  
陶器市茶摘 最中の山の裾  
水母覆へるフェリーの横波に  
墓山に誰も採らざる蕨閑け  
鯉幟畑にも立てて佐賀平野

大阪 大井 邦子

注意書あちこちにあり花の園  
手に受けし落花すかさず地に落下  
厄除けの糸投げ掛ける壬生狂言  
土蜘蛛の糸奪ひあふ壬生の客  
単調に眠り催す壬生念仏

東京 大川富美子

中伊豆は水のふるさと花山葵  
水うまし風またうまし山葵沢  
ゴツホの黄いまを盛りと花菜畑  
何もかも許せる齡忘れ霜  
呼鈴のかるやかな音五月晴

香川 大空 純子

母の日の品物赤と決めてをり  
雪柳静かに掃きて准看婦  
ぼうたんの花影ゆつさと右左  
恒例に犬こころえる燕の巢  
律儀者 曆通りに 更衣

兵庫 岡 有志

母の日やりハビリの靴履きたまふ  
げんげ田に寝て青年の四面楚歌  
くれなゐの魚鱗跳ね跳ぶ桜鯛  
ペンテコステいざ生きめやも風立ちて  
石室の美人が緑の風に覚む

埼玉 岡田 章子

百幹の竹青さ増す夏来たる  
自在鉤の鍋に活けありすかし百合  
生垣の茶摘みに家族揃ひけり  
藤棚舟・谷外郎の語の房の下ゆく背を曲げて  
鯨碑舟・谷外郎の語に素外の一句 春夕焼

# 薬草歳時記

(二五九) ニガウリ (苦瓜) ツルレイシ  
菅原由紀

荔枝裂けて肉漿むしろ凄しく 川端 龍子

熱帯アジア原産で、日本には江戸時代初期に入ってきた。つる性一年草。沖縄、奄美大島地方では夏の果菜としてずーっと食べられていた。九州全体でも昔からよく食べていた。

私をはじめて食べたのは、20年程前の沖縄でのことだった。健康に良い食べものだからと友人の家庭でご馳走になった。沖縄どうふと豚肉の薄味のゴーヤチャンプルだった。少々苦味があつて、とても美味しく、沖縄の人々の健康と長寿の源だと感じた。

その頃、東京ではまだ余りみかけることの無いものだった。今年3月再び訪れた沖縄でのゴーヤ料理では余り苦味を感じなかった。

苦瓜、ツルレイシはウリ科の一年生のつる性植物で、果実がムクロジ科のレイシに似ているウリなので、つる状の

レイシの意味でツルレイシと言う。

4月中旬に種子をまくと、10日前後で発芽する。葉柄は長く、雌雄同株。夏に五弁の黄色の単性花をつけ、秋には実を結ぶ。大きさは10〜20cm位で、外皮はいぼ状で緑色。果皮に苦味があるので苦瓜(ニガウリ)と言われる。正式にはツルレイシ。

コリコリとした歯ざわりと苦味があり、ビタミンC、カロチン、ミネラル、繊維を含み夏バテ防止の効果がある。薬用部分は果実。解熱、解毒、下痢どめの効果がある。一日分6〜10gに水300mlを加えて煎じて1/3に煮詰めて食間に服用する。

また果実や種子の他にも根、茎、葉、花にも効果がある。ヨーロッパやアメリカでは観賞用に栽培されている。

他に、さつまれいし、白れいし、太みどり、太れいし等の種類がある。

楊貴妃が好んだ荔枝はライチのことで、イチゴ位の赤い円い実のことで、ムクロジ科の小高木になる果実。全く別のものである。

夏の沖縄のニュースを聞きながら、苦瓜の料理とともに平和であることを心から願っています。

参考文献 「牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

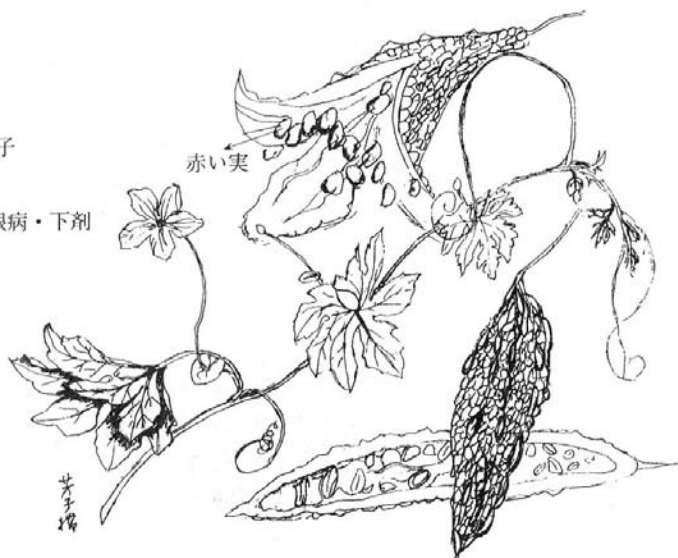
著者略歴神戸薬科大学卒

ツルレイシ (ニガウリ) [ツルレイシ属] *Momordica charantia* L.

蔓荔枝 (中) 苦瓜 (うり科) *Cucurbitaceae*

薬用部分：  
果実・種子

果実  
発熱・眼病・下剤



中田  
芳子  
画

沖繩の壺より荔枝もろく裂け  
長谷川かな女

苦瓜も真黄に秋をつくしおり  
百合山羽公

ご赦免の日まで禁酒ぞ荔枝の実  
角川 源義

荔枝熟れ萩咲き時は過ぎゆくも  
加藤 楸邨

実をひそめ雨晴れてぬし荔枝棚  
八木林之助

還らざる島苦瓜の汁ねばり  
沢木 欣一

苦瓜という悶々のうすみどり  
坂巻 純子

苦瓜を噛みて火山灰降る夜なりけり  
草間 時彦

苦瓜をひとつ覚えに刻む父  
品川 鈴子

ひと月で軒に届けり蔓荔枝  
勝野 薫

(くろっけ)

# 鈴の奏

品川鈴子選

花吹雪幼い口で吹いてみる 愛媛 濱田ヒチエ

絮蒲公英吹いて触つて下校児等

青芝へ靴はかぬ児を制す声

干拓地海への平野麦の秋

春宵に冠者よろけつゝ橋掛り 兵庫 岩崎可代子

風流傘かざす舎人に若葉風

懸葵はや干涸びて祭果つ

賀茂祭確と走馬の蹄あと

花菜畑いつしか夫と距離できて 兵庫 櫻木 道代

白川の水泡に落花渦まきて

心配事少し抱えて遅桜

町内に知らぬ道あり紫木蓮

大籠に牡丹干したり長谷の寺 兵庫 市橋 香

姫崎の灯台下もとに栄螺焼く

炭鉱を出で薫風にさらされし

両津へのジェットfoilに寄す卵浪

父の風母の風来る藤の花 神奈川 永塚 尚代

松落葉払ひ昼餉の卓とせむ

御料馬のひと声啼いて若葉光

病室の外は五月の陽の光

マタニティドレス縫い上ぐ花は葉に 兵庫 岡村 尚子

殉職の棺の若し藤の花

初めての紅を引かれし祭笛

母の日や育児日記の読まれをり 兵庫 国永 靖子

春昼のすりこぎの黙永平寺

春愁の離れぬままに海たいら

帆船に鯉幟上げ一〇〇年祭

「日本丸」「海王丸」に南風吹く 兵庫 恒成久美子

天守より望む溜池黄砂ふる

花ぐもり綿菓子を食べぶおさげ髪

葉ざくらの川にもどり来鷺一羽

咲きそめし藤の花まだ棚の上

陣太鼓鳴らして送る初夏の旅 埼玉 小田 知人

出港のテープを躲し燕飛ぶ



# 秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句〜十五句 宮 原 利 代 〃

\* 選句は全て 品川鈴子

花吹雪幼い口で吹いてみる

濱田ヒチエ

花菜畑いつしか夫と距離できて

櫻木 道代

桜のはなびらがしきりに舞い散る有様は、その只中に居て振り仰ぐ童女には、美しくも不思議な現象なのでしよう。これは神様が息を吹きかけて居るのだろうか、幼い知恵をめぐらせて、自分もおちよぼ口で、精一杯に手伝っている積もり。

風流傘かざす舍人に若葉風

岩崎可代子

炭鉞を出で薫風にさらされし

市橋 香

風流ふうりゅうとは、祭礼などの華美な行列・扮装、または華美を誇示する芸能の様式のこと。葵祭りでは、各時代の装束で供奉者は冠や牛車に葵を飾って渡御する。華麗な貴婦人には召抱えの舍人が、美々しい装飾の長柄傘を差しかけて、洛中を練り歩く。御所から発して緑深い下鴨神社から上賀茂神社の辺に行列が到ると、若葉の風が心地よい。五月十五日の京に練り広げる一大絵巻物。

炭鉞には坑内掘りと露天掘りがあります。此のお句は坑内掘でしょう。坑道を降り炭層に沿って掘った坑道の跡を見学されたのでしょうか。段々と暗い所には慣れて来たが見学を終わって外に出ますと、外は青葉を渡るよき香と甘さを感じる風が心地よく吹いていたのでしょうか。暗い所と明るく新鮮な薫風との対比がよいと思います。

御料馬のひと声啼いて若葉光

永塚 尚代

御料は「皇室の所有使用」の尊敬語。

数年前に日赤奉仕団で皇居の御奉仕に上った事があります。馬車庫、厩舎を見学しました。馬車庫には皇室の方々の行事に御使用された馬車、特に天皇陛下の御成婚の時にお乗りの馬車等々整然とおさめられていた事と、白馬が何頭か飼育されていたのが思い出されました。此の句は若葉光で下五が留められているのが佳いと思います。

殉職の棺の若し藤の花

岡村 尚子

職務を大切にお励みされていたお方のご出棺。いかにもお若く惜しいお方を亡くされました。御家族の方もお見送りの方々も涙々のお別れであろうとお察し致しました。私達も御冥福をお祈り致します。季語の藤の花で少し救われました。

春愁の離れぬままに海たいら

国永 靖子

春は花が咲き人の心が華やかに浮かれる半面、ふつとも悲しさにおそわれ気が塞ぐことがある。春の哀愁とでも言うのでしょうか。春の哀愁に落ち入り海に癒しを求めに来て見ますと、海は何事も無かった様にいつもの如く波が

打ち返されています。この海の営みに作者の心も癒された事と思います。

咲きそめし藤の花まだ柵の上

恒成久美子

良き風が吹いて来たのに藤の花はまだ蕾が固く柵の上で少し膨らんでいる程度、早く満開になり柵より垂れ下れば吹き来る風に良き香がするのにと「和歌」の世界に誘われる句となりました。

歓迎の花輪に混じる仏桑華

小田 知人

〈ポムペイの港に入るや朝の虹〉とどちらを選ばして頂くか迷いました。長い船旅でしたが初夏の航海を満喫しましたと添え書きがございました。楽しい旅を満喫なされ港に入りますと歓迎の花輪が用意されました。其の花輪に真紅のハイビスカスが混ざっていました。此のハイビスカスの華にほっとした安堵感と満足感が伺えます。海外俳句は難しいと言われますが四句とも無難にまとめられ何れを頂こうか迷いました。(以下略)